

札幌開拓の残照を西区・手稲区に辿る

―「第四二回全道勤労者文学歴史探訪」に参加して

正木 浩 司

1. 前回と同じく、コロナ禍で縮小開催

一般社団法人北海道労働文化協会（会長＝神谷忠孝・北海道大学名誉教授）（以下、労文協）は二〇二一年一〇月三〇日、「第四二回全道勤労者文学歴史探訪」（以下、文学歴史探訪）を開催した。抜けるような快晴のもと、道内から二六人が参加した。

労文協主催の文学歴史探訪は、年一回程度のペースで長年続けられてきた現地視察事業であり、毎回、視察先とテーマを定め、史跡や歴史的遺構、博物館・美術館などの文教施設、自然景勝地などを訪れる。参加者は会員などから募集し、貸切バスで一泊二日ないし二泊三日の日程で旅をするというのが通例である。

前回＝第四一回の文学歴史探訪（二〇二〇年九月二十九日）は、コロナ禍の影響を考慮し、十勝方面の視察という当初の計画を断念し、札幌市内の

文化遺産などを一日日程（午前九時～午後五時）

で巡る内容に縮小されたの開催となった。今回の第四二回も、当初は十勝方面の視察をめざしたものの、なかなか収束しないコロナ禍を理由に当初計画は前回同様断念され、実施日も当初予定（九月下旬）から一カ月ほど延期した上で、札幌市内を一日日程で巡る縮小開催となった。

今回の視察先は、前回と同じく札幌市内だが、視察先を市西部に位置する西区・手稲区に限定すること、「屯田兵」などをメインテーマに据えることよって一定の差異化を図っていることがうかがえた。前回に続き今回も、札幌市の始まりの歴史を深掘りする好機となり、一日日程ながら充実した内容となった。

この第四二回文学歴史探訪に、当研究所からは、所内設置の「北海道近現代史研究会（主査＝押合一・酪農学園大学教授）の活動の一環として、同研究会のメンバー四人のうち、筆者を含め三人が参加した。当日の様子について以下に概要を報告する。

2. 五天山公園で地形の特徴と米作の歴史を学ぶ

午前九時、参加者一行を乗せたバスは、JR札幌駅北口前を出発。今回は出発時から最後まで、バスにガイド役の方が同乗し、視察先の地域や史跡などに関する解説を随時行なった。ガイドは「発寒歴史漫歩倶楽部」という団体で代表を務める国田洋治さん。同団体は、二〇一一年の発足で、「発寒の歴史を学び、発見する有志の会」とのことである¹⁾。

国田さんのガイドのもと、バスはまず、北一条通りから北海道神宮の北側を抜けて西進し、琴似発寒川に沿って進んだ先、西区福井地区の「五天山公園」へと辿り着いた。同公園は現在、指定管理者制度が適用されており、公設民営の運営体制がとられている。現行の指定管理団体によると、「五天山を望む広大な敷地に、パークゴルフ場や炊

<付表> 主な視察先

	史跡・施設名	所在地
1	五天山公園 水車小屋	西区福井423
2	山口緑地 手稲山口バツタ塚	手稲区手稲山口324-308
3	山口運河 星置2号橋周辺	手稲区星置3-5
4	手稲区民センター —特別講演「札幌の屯田兵」	手稲区前田1条11丁目
5	新川 天狗橋	西区発寒17-4
6	発寒神社	西区発寒11-3
7	春日緑地	西区発寒10-4
8	琴似屯田兵村兵屋跡	西区琴似2-5
9	琴似神社	西区琴似1-7
10	西区役所 屯田の森	西区琴似2-7



五天山公園内に復元された水車小屋

事場などを備える総合公園」と紹介されている。公園に到着すると、一人の現地ガイドの方が待機していた。元高校教師で、この地区の歴史や地形に関する調査を続けている柏原信さんである。五天山公園での視察の中心は、園内に復元された「水車小屋」であった。

現在では札幌市西区に含まれる西野、福井、平和、西町、発寒の各地区は「発寒川扇状地」に属する。このうち西野、平和、福井は、明治期に本州からの移住者が本格的に開拓を進め、市内有数の米作地帯となったという。その原動力となったのが、琴似発寒川などの河川から取水する農業用水路の整備である。柏原さんによると、発寒川扇

状地の特徴は何より急勾配にあるという。五天山公園は海拔高度が一四〇メートルあり、「札幌のテレビ塔のてっぺんのアンテナの先と同じくらい」、「JR発寒中央駅までは約六キロで高度差は一二五メートル。平均勾配は一〇〇メートルあたり二〇メートル強」、「豊平川の平均勾配の二倍という驚きの急勾配」とのこと。

ここに農業用水路が張り巡らされ、米作を支えた。水車もこの地区での米作の展開に大きな役割を果たしたものである。ピーク時（昭和二〇年代）には西野地区だけでも一四〇基あり、これを用いて主に収穫後のつき臼（粳摺り）を行っていた。現在は宅地化されたこの地区で当時の状況を嗅ぎ取るとは困難だが、復元された水車は、この地

区でかつて隆盛を誇った米作の歴史と、それを支えた地理的な特性をも伝えている。

3. 手稲山口の明治史を伝えるバツタ塚と運河

五天山公園を去った一行は、次の目的地「山口緑地」(手稲区手稲山口二九五-一)へ向けて移動。五天山公園から山口緑地へ向かうとなれば相應の時間がかかるため、このやや長めの移動の機会を捉えて恒例の神谷会長による「車中講話」が車内で行われ、小説の中に描かれた札幌の描写を通じて市史の一端を学んだ。

あわせて、国田さんのガイドにより、車窓から手稲山中腹に位置する「旧手稲鉱山選鉱所跡」(手稲区稲穂)を木々の隙間に展望した。同鉱山は明治期に採掘が始まり、一九四三(昭和一八)年に鉱石産出量のピークを迎えた後、戦後の財閥解体などに伴い急速に衰退し、一九七一(昭和四六)年に完全閉山となっている。往時の隆盛は「金山」の地名に残る。

山口緑地に到着すると、バスはさらに緑地内の細い道を分け入り、北端にある史跡「手稲山口バツタ塚」へと辿り着いた。明治期にこの地で発生した蝗害の歴史的事実を伝える札幌市指定史跡(一九七八年八月二二日指定)である。

「蝗」は「イナゴ」とも読まれ、バツタ科の昆虫類全般を指す。蝗害とはすなわち、バツタが大量発生し、農作物を食い尽くすなどして人の社会



手稲山口バツタ塚

や生活にダメージを与える自然災害である。二〇一九年以降、東アフリカでサバクトビバッタが断続的に大量発生し、中東やアジアの国々にも飛来して、農作物などに大きな被害を出していることは記憶に新しい。「聖書」を構成する「出エジプト記」や「黙示録」にも登場する、人類にとっては何らか昔から厄介な自然災害の一つである。

これが明治期の一八八〇年代前半期に北海道内で発生し、十勝から始まり、日高、胆振を経て、札幌にも飛び火して、当時の入植から間もない開拓民たちを苦難に陥れた。バツタ塚には、この当時大量発生したトノサマバッタの死骸や卵が集められ、土中に埋められている。



山口運河（星置2号橋付近）

山口緑地を去って数分、次に降り立ったのは小さな橋の上であった。橋の名は「星置2号橋」で、市立星置中学校（手稲区星置三一五）の北側に位置する。この橋が架かっているのは、「山口運河」で、同橋付近の河川敷を短時間ながら散策した。整備された散策路の清潔感と、水上で戯れるカモの群れが印象に残る。

山口運河は、かつては山口村と呼ばれた地区への生活物資の舟運や農業用水の引き入れ、排水などを目的に、「花畔・銭函間運河」の一部として一八九七（明治三〇）年に開通された。しかし、程なく付近で鉄道の整備が進んだ影響などにより、七年ほどで当初の役割を終えた経緯がある。この運河を

めぐむる状況が大きく変わったのは開通から一〇〇年が経過した一九九〇年代後半のこと。地域住民の意向を受けて、護岸・散策路が市によって整備されたほか、地区の歴史を後世に伝えることなどを目的に「手稲山口運河まつり」が毎秋開催されるようになり、二〇一九年で三回目を数えている。

4. 北海道に最初に入植した屯田兵「琴似屯田」

星置地区での山口運河の視察を終えると、手稲区民センター（手稲区前田一一一）へ移動。センター内の会議室で昼食休憩をとった後、特別講演を聴講することになった。

特別講演の演題は「札幌の屯田兵―警備と開拓に従事した先駆者」、講師は前回と同じく、札幌市市民文化局所属の文化財保護指導員である山川伸也さんが務めた。六〇分間の講演では、まず屯田兵制度に関する制度創設の歴史や背景、明治期以降の全般的な概説を行った上で、午後からの視察日程に組み込まれている琴似屯田に関する説明などが行われた。

明治期の北海道への屯田兵の入植は一八七五（明治八）年から一八九九（明治三二）年まで行われ、この間に道内各地に三七七村が開設され、計七三三七戸が入植している。このうちの最初の入植（兵村設置）が一八七五〇七六（明治八〇九）年の「琴似・養寒」であり、士族屯田二四〇戸による兵村を形成した。現在の札幌市の枠で言えば、屯田兵村



特別講演の様子（手稲区民センター）

は「琴似・発寒」のほか、一八七六（明治九年）に「山鼻」（土族屯田二四〇戸）、一八八七〜八八（明治二〇〜二二）年に「新琴似」（同二二〇戸）、一八八九（明治三二）年に「篠路」（同三二〇戸）にもそれぞれつくられている。講演によると、最初の事例である琴似の屯田兵村は、敷地の区割りや兵屋の間取りなどにおいて後続の兵村の基準になったという。

このほか、講演で新たに学んだ知見として、以下の二点が特に印象に残る。

第一に、屯田兵制度は明治期になって突如創設されたものではなく、その前史として、幕府の政策である「在任制度」、すなわち、幕府直轄武士が警備のために蝦夷地に通年移住する制度が存在して

いたということ。後述するとおり、一八五七（安政三〜四）年には、発寒の地に永田休蔵ら下級武士約二〇人が移住し、開墾も行っていったという。

第二に、屯田兵の設置目的には、「対ロシア防備」と「北海道開拓」のほかにもう一つ、地元民衆蜂起に備えた「北海道の治安維持」の側面もあったということである。

5. 新川開削工事と囚人労働の可能性

午後からの視察は、西区の琴似・発寒地区の開拓に関わる史跡等の視察がメインとなった。両地区は、一九六五（昭和三〇）年に札幌市と合併するまでは琴似町として存在していたところであり、琴似町の発足（一九四二年町制施行）に至るまでも境界の変更が度々くり返されたところである。

まず発寒地区に入り向かったのは「天狗橋」（西区発寒一七―四）という橋である。その名は棟梁のあだ名に由来することと¹¹。天狗橋の架かる新川は、全長一三キ、西区内の起点からまっすぐ北区との区境を流れ、石狩湾へと注ぐ人口河川である。主に洪水対策を目的に一八八〇年代後半頃に開削されたという。そして、確たる証拠は不十分とされながらも、わずかに伝わる当時の目撃証言などから、新川の開削工事の労働力は、樺戸集治監（月形町）に収監されていた囚徒たちが担ったとされる。すなわち、新川は囚人労働の産物の可能性があるということである。

樺戸集治監は一八八一（明治一四）年の開庁で、

同集治監の囚徒が動員された外役（囚人労働）の産物としては、石狩・空知地域の道路開削や石狩川の河川浚渫などが知られる¹²。河川改修は道路開削に付帯する関連工事として行われることが多かったとい¹³、当時の状況を想像させる。

囚人労働は、タコ部屋労働などと並ぶ強制労働の一形態であり、労働者を人権無視の過酷な生活・労働環境のもとで働かせるものである。北見市の「鎖塚」などの史跡や、網走市の「博物館網走監獄」の展示物などが語るように、交通インフラの整備や炭鉱・鉱山での採掘など、北海道の成り立ちを語る上では決して外せない歴史的事実である。それは札幌も例外ではなく、前回の文学歴史探訪では「北海道電力藻岩発電所」の建設工事におけるタコ部屋労働の事実を学んだが、今回も新川開削に関わって囚人労働の可能性にぶつかることになった。事の性質上、未だ全容が明らかになりきらない領域であり、この領域も含めた北海道近代史の構築は現在進行形の課題であろう。

6. 発寒から琴似へ、史跡から想像する当時の風景

天狗橋の視察を経て、「発寒神社」（西区発寒一―一三）前に降り立った一行は、同神社の境内にある「発寒移住記念碑」や「環状列石」などを視察した後、近距離にある「春日緑地」（西区発寒一〇―四）へは徒歩で移動し、ここに建てられた「発寒開村記念碑」と「永田休蔵の碑」を視察した。永

偽文化」第二九二号（二〇二二年一月一日発行）に詳細なレポートおよび関係記事が掲載されており、あわせてご参照いただけると幸いです。

【注】

- (1) ウェブサイト「発寒べんり帳」の掲載情報による。
- (2) 五天山公園の二〇二二年一月現在の指定管理者は「五天山・宮丘パークマネージメントグループ」で、株式会社南香園、株式会社真栄造園、株式会社園建、NPO法人琴似発寒川市民フォーラム西区ホテルの会の四社による共同企業体である。施設区分は「五天山公園・宮丘公園」。現行指定管理期間は二〇二二年四月一日から二〇二六年三月三十一日の五年間。
- (3) 五天山・宮丘パークマネージメントグループのウェブサイトの掲載情報による。
- (4) 札幌市西区役所ホームページ掲載の「地区別の歴史」を参照した。
- (5) 主催団体作成の当日配付資料⁸⁾。
- (6) 山口緑地にも指定管理者制度が適用されており、二〇二二年一月現在の指定管理者は「公園緑化協会・ていねグリーンコンソーシアム」で、公益財団法人札幌市公園緑化協会、株式会社スペース・デザイン工業、マルミプラス株式会社、株式会社横山造園の四社による共同企業体である。施設区分は「前田森林公園・星置公園・明日風公園・山口緑地」。現行指定管理期間は二〇一八年四月一日から二〇二二年三月三十一日の四年間。
- (7) 以上、本段落については、当日配付資料のほか、札幌市役所ウェブサイト掲載の「コラム「川のすがた」二〇一九年度第三四号「山口運河」を参照した。
- (8) 有馬（二〇二〇）四四⁹⁾。
- (9) 有馬（二〇二〇）四八⁹⁾および一六六〜一六八⁹⁾。発寒屯田は琴似屯田の分村扱いで、一個の独

立した兵村中隊とは見なされていないかったという（一六七⁹⁾。

- (10) 有馬（二〇二〇）四八⁹⁾。
- (11) 当日配付資料一三⁹⁾。
- (12) 新川開削工事と囚人労働の関係については、当日配付資料一三⁹⁾のほか、札幌市北区役所ホームページ掲載の「歴史と文化」の関係記事も参照した。
- (13) 重松（二〇〇四）四五⁹⁾および五〇⁹⁾。
- (14) 重松（二〇〇四）五〇⁹⁾。
- (15) 発寒神社ウェブサイト掲載の「由緒」による。
- (16) 「琴似屯田兵村兵屋跡」は、道内各地の他の屯田兵関係の史跡・施設とともに、「屯田兵村と兵屋」の枠組みで、「北海道遺産」の指定（第二回選定分（二〇〇四年一月二日選定）、第四八号）も受けている。

(17) 北海道神社庁ホームページ掲載「琴似神社」による。

(18) 本文で紹介した「琴似屯田開村記念碑」のほか、「琴似屯田百年記念碑」、「陸軍屯田兵第一大隊第一中隊本部趾碑」、「屯田兵本部趾碑」、「琴似屯田兵顕彰碑」がある。

【参考文献・資料】

- ・ 有馬尚経「屯田兵とは何かその遺跡と変遷」幻冬舎、二〇二〇年七月
- ・ 重松一義「史料 北海道監獄の歴史」信山社、二〇〇四年一月
- ・ 北海道労働文化協会事務局「第四二回全道勤労者文学歴史探訪記 さつぽろ開拓の歴史をたどる、そして：語り継ぐ」+関係記事「労偽文化」第二九二号所収三〜一四⁹⁾、一般社団法人北海道労働文化協会、二〇二二年一月
- ・ 正木浩司「文化遺産の視察を通じて札幌の近代史を学び直す」「第四一回全道勤労者文学歴史探訪」に参加して（「北海道自治研究」第六二四号所収一六〜二〇⁹⁾）公益社団法人北海道地方自治研究所、

二〇二二年一月

【参照ウェブサイト】

- ・ 公益財団法人札幌市公園緑化協会
<https://www.sapporo-park.or.jp/>
- ・ 五天山・宮丘パークマネージメントグループ
<http://www.nankoen.co.jp/gmpng/>
- ・ 札幌市北区役所「歴史と文化」
<https://www.city.sapporo.jp/kitaku/syoutkai/rekish/index.html>
- ・ 札幌市手稲区役所「手稲のまちの案内板」
<https://www.city.sapporo.jp/teine/chku/index.html#index10>
- ・ 札幌市西区役所「地区別の歴史」
https://www.city.sapporo.jp/mishi/syoutkai/rekish/rekish_area.html
- ・ 札幌市役所「コラム「川のすがた」」
<https://www.city.sapporo.jp/kensetsukasen/sugata/index.html>
- ・ 札幌市役所「札幌市内の指定文化財（国・道・市）」
<https://www.city.sapporo.jp/shimin/bunkazai/pdf/site1.html>
- ・ 札幌市役所「指定管理者制度」
<https://www.city.sapporo.jp/somu/shiteikannishah/index.html>
- ・ 発寒神社
<http://www.hassamujinja.com/>
- ・ 発寒べんり帳
<http://hassamu.com/index.html>
- ・ 北海道遺産
<https://www.hokkaidoisansan.org/>
- ・ 北海道神社庁
<https://hokkaidojinjacho.jp/>

※ 最終閲覧は二〇二二年一月三日。

へまぎき、こうじ・公益社団法人北海道地方自治研究所研究員